



小さな 肩を 震わ せて

有村行人

目が追ってしまうのはその白さゆえか。自ら発光するよう
なまばゆさゆえか。

身近なところでそんな人に出会うと思っていなかったから、扉が開いた時は驚いた。懐かしい工藤の照れ笑いに続いて入ってきた少女に、自分だけでなく、桂木も岩瀬もため息をついた。

真っ白な顔、栗色の髪、ほっそり伸びた手足。披露宴で紹介された奥さんは北陸美人でやはり真っ白だったから、遣伝だろう。でも、奥さんが漂わせていた、世間一般でいうところの美しさとは少し違うかもしれない。長い眉毛に縁取られた驚くほど大きな目は、鳶色の瞳と白目のコントラストが鮮やか、白い肌とよく合う一方で、人によつてはこわいと感じるくらい冴えている。一五〇センチくらいの小さな身体に、思慮深い表情も独特のコントラストだ。とにかく、目を引く。

少女漫画の主人公が生身の人間になってしまったような姿に思わず唖ってしまったが、考えるまでもなく本人がそれで喜ぶとも思えない。案の定、こつちにどうぞと隣の席をにこやかに席を勧める岩瀬に、少女は無表情のまま会釈すると、

ストンと音を立ててはまった。ヴァイオリンケースを抱えて、席に身を埋めた。

本当にお久しぶりで、と頭を下げる工藤に、いやいやお元氣そうで何より、と桂木が無難な挨拶を返す。オーケストラを引退してからあまり演奏活動をしている様子のない工藤とは、八年以上会っていない。

「見学が来るよつて言われたから誰かと思ったら、工藤さんと娘さんだったなんてねえ」岩瀬は少女に目を向けた「ヴァイオリンだよね、弾く？」

少女は小声で答える「今すぐはいいです、見学ですし」

「じゃあ、弾きたくなったら入ればいいよ」

三人で使うには広めのサロンスタジオも五人ならちょうどよく、ピアノから少し離れたコーナーに椅子を楕円に並べてピタリと収まる。コーヒーの香りが漂ってきた。桂木がポットから紙コップに注いでいる。岩瀬が工藤親子に回して、再会と少女の歓迎を祝する。

「あれ、コーヒー、大丈夫なんだ？」

岩瀬の視線に、少女は首を縦に振る「おばあちゃんもお父

さんも好きで、一緒に飲むから」

中学二年くらいからコーヒーに慣れてきた、と付け加えた工藤は、姿勢も口調も改めた。

「かつら君にはちょっと伝えたけど、ヴァイオリンとピアノ、特にヴァイオリンをやってきたんだけど、一人で弾いていた時期が長くてね。アンサンブルをやってみたいけど、大人数より室内楽編成がいんじゃないかと思って、ピアノトリオの見学をまずお願いしたんでね。今日は、よろしくお願ひします」

時々桂木に目をやっていた工藤は、深々と頭を下げた。桂木よりさらに先輩の工藤が頭を下げる様に、思わず頭を下げ返した。岩瀬も丁寧にお辞儀をしている。

「お父さんはこれで帰るね？」

「うん」少しさみしそうに微笑んだ工藤が娘を見返す「楽しいアンサンブルを見せてもらおうといいよ」

コーヒーの残りを一気に飲み干すと、立ち上がった。そんなに急がなくても、という岩瀬の声も、たまには一緒に弾けば、という自分の声も断ち切るように照れ笑いを浮かべ、そ

そくさと出て行った。岩瀬と目を合わせたが、彼女は素早く少女に向かう。

「そういや、まだ名前も聞いてないよ？」

「さゆき。工藤さゆきです、よろしくお願ひします」

「私は岩瀬唯美。漢字で唯一の美って書くから、みんなはゆいって呼んでるね」

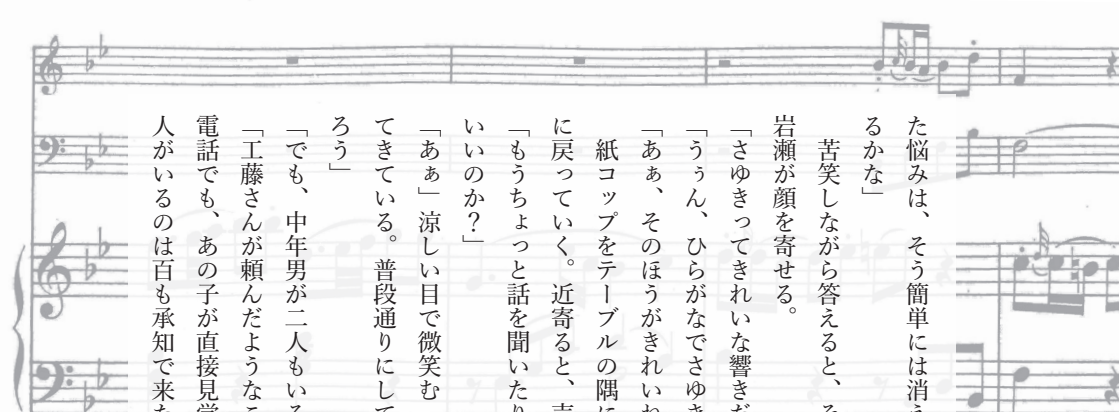
小さく頷くさゆきに、岩瀬はざっと皆を紹介する。コーヒーを出してくれたのがピアノの桂木さん、かつらさんと呼んでる。こつちのチェロのおじさんは村山さん、むらさんと呼んでる――

「ネットだと、*hamlet* って名乗るんだ。村を英訳すると、*village* のほかに *hamlet* というのもあって、シェイクスピアとの掛詞みたいだから」

自らそう付け加えると、さゆきはじつと見据えつつ、小さく頷いた。吸い込まれそうな眼だ。ふいに形のいい唇が開いた。

「ハムレットみたいに悩んでるんですか」

「そうねえ、高校生の頃、大人になったら消えてると思って



た悩みは、そう簡単には消えないものだ、くらいには思っているかな」

苦笑しながら答えると、その言葉をブロックするように、岩瀬が顔を寄せる。

「さゆきってきれいな響きだね、早い雪って書くのかな」

「ううん、ひらがなでさゆき」

「ああ、そのほうがきれいね」

紙コップをテーブルの隅に寄せていた桂木が、ピアノの前に戻っていく。近寄ると、声を潜めた。

「もうちょっと話を聞いたり、自己紹介っぽいことしなくもいいのか？」

「ああ」涼しい目で微笑む「見学に来たんだし、楽器も持ってきている。普段通りにしている方が、リラックスできるだろう」

「でも、中年男が二人もいるところで……」

「工藤さんが頼んだようなことを言ってたけど、メールでも電話でも、あの子が直接見学を望んだって聞いているんだ。大人在るのは百も承知で来たんだろうし、お客さん扱いする

方が失礼じゃないかな」

「そういうものかな」

「あの子はそういう子だろ、小さなお客さん扱いは特にダメだよ」

思わず目をさゆきに向けると、そばにいた岩瀬が立ち上がった。

「続きをやろう、モーツァルト」

「一楽章の展開部からだな」

「じゃなくて」桂木が宣言した「一楽章をもう一度通して、気になるところをチェックする」

ピアノ三重奏曲変ロ長調K五〇二、冒頭は乾いた風を切って気持ちよく進む自転車。最初に合わせた時は古い馬車でのんびり様子見していたのに、今度は四輪駆動車でがっちり地面をつかんで走る、中庸はないのか。テンポは速くないが、力が入っている。ウィーン古典派の優美さが得意な桂木がそのなかのだから、岩瀬はマッチョにフレーズを回して、チェロとニュアンスがずれる。苦笑しながらも、一度ついた勢いは止められるものではない。さゆきを視界の隅で確認すると、

ヴァイオリンケースをいつの間にか隣の席に置き、曲の流れに身体を揺らしている。

とりあえず第一楽章を通すと、三人で顔を見合わせて吹き出した。思わず岩瀬に言う。

「やりすぎだつて」

「そっちこそ、あんなに煽つといつて」

「それを言うなら、最初のピアノからなあ」

「いやまあ」 桂木が珍しく頭をかいている「だいぶ力んじやつたな。軽やかにやらないとなあ」

つぶやくと、冒頭のピアノのフレーズを馴らしている。岩

瀬は立ち上がると、さゆきの方へ向かった。

「弾かない？」

「え？ でも、今日は見学だし」

「でも、もう弾きたそうだったよ？ いやなら無理には言わないけど」

下唇を噛み締めたさゆきは、はい、とすぐに立ち上がり、楽器を取り出した。次はさゆきちゃん入るよ、という岩瀬の声に、桂木がピアノの手を止めた。楽器を手近づくさゆき

に、A音を出す。

調弦を始めた。手慣れていて速い。弓を持つ手首のやわらかさ、伸びやかな姿勢に、幼い頃からの鍛錬が見える。入ってきた時のちびっ子ぶりはどこへやら、急に翼を広げた鳥のようでもある。

「初めて？」と声をかけてみた。うんと頷きながら、口を開く。

「今一度聴いたし、楽譜をみればわかるから」

答えつつ楽譜から目を離さない。三分くらい初見の時間をとる？と聞いても、頭を振る。桂木が大きめの声をかけた。

「ピアノから始まるんで、最初は好きなように入ってね」

こちらに目配せすると、桂木がさつきよりずっとやわらかい音で入る。さゆきは耳と楽譜に意識を向けたまま、チェロの自分と同じタイミングで構えた。なるほど、弾ける子なんだと思つた時だった。

ネコが跳ねて転がる軽やかさ。

なんて鮮烈でエッジのきいた音！

モーツァルトにしては鋭すぎるが、初めてなら上出来なく





らい。弓を大きく使って、楽器全体を鳴らしてくる。岩瀬を確認すると、目を丸くしているが、こちらに気づいた途端、指で楽譜を指した。集中しなさい、次が来てるよ、と。

もちろんわかっていて、とこちらも返すが、呼吸を読むようにチェロに寄り添いつつ、ピアノの上昇音も逃さない。反応がものすごく速い、あつという間に彼女のまっすぐな世界が立ち現れる。音の鋭さが一切の夾雑物を排除して、ひたすら上へ上へと進むのだ。

木漏れ日も、日向と日影の対比も、デジタル写真のように鮮やかで、曖昧なものは許容できないと言いたげな空気を張りつめたまま、あつという間に一楽章が終わった。一筆書きのように弾く人だなと思ってみると、最初に構えた姿勢に戻っていて、何事もなかったように楽器をおろす。

なるほど、これは一種の天才かもしれない、自負心を持ってやっているとはいえ、自分らのようなアマチュア達の元にいるいい子だろうか。弓をおろすと、岩瀬が拍手した。

「びっくりした。いや、ほんとに」

さゆきははにかみもせず、静かに会釈した。



「でも、ちょっと鋭すぎかな」

自分より先に桂木が言った。

「なんか、私が弾くといつもこうなっちゃうんです」

「そっか。まあそういう風にしか聴こえないのかもしれないけど、モーツァルトの頃って馬車の移動だったでしょ。ガタゴトいう馬車とか、午でギャロップしているところを想像すると、もうちよつとのどかな空気もあるかもね」

「でも」口を挟もうとするより早く、さゆきが声を出していた「今は馬で移動しないし、せいぜい自転車ですよ」

大人びているわけじゃない、既に大人の顔をしている。あはは、と笑いながら岩瀬が近づいてきた「十八世紀のオーストリアの田舎じゃなくて、現代の舗装された山道を走る時の景色ね」

関係ないことだが、思わず尋ねてしまう。

「いまいくつだっけ？」

「高校一年です」

急に素の顔に戻り、まっすぐこちらを見つめる。ドキドキしてくるほど大きな鳶色の眼に「俺がその年の頃は、もっと

ぽーっと弾いてたかもある」と苦笑してしまふ。

「ぽーっと弾いてていいんですか」

元々低めのさゆきの声が、一段下がる。なるほど本当に真っ直ぐなんだと思いつつ、すぐに返す。

「ものゝたとえだよ」

「さゆきちゃん」岩瀬がにこやかに割り込む「文字通りにとらない、このおじさんはこんなこと言って、人を煙に巻いたりするから」

「まあ、とつてもしつかり弾けることは、よくわかりました。もう一度頭からやってみようか」

桂木の声で、素直に楽譜を最初のページに戻すと、すぐに楽器を構えた。

「最初に出る時のターン、鋭すぎるなら、こんな感じでしよるか」

今度は弓を立てず、音をふわりと飛ばす。

「うん、ピアノのメロディを圧縮したような形になってるし、流線型だから力まなくても感じは出るよね」

頷きながら楽譜に書き込もうとしてペンを手にした途端、

立ち上がった。

「すいません、あたしの楽譜じゃないっ……」

大人三人が一斉に笑い、岩瀬が手で押しとどめた「いいよ、そのまま書きちゃって。あとでコピーしたげるし」

スタジオから出ると、次の利用者が入り口で待っていた。

桂木がさゆきを先に出すと、視線が集中する。これだけ目を引くの、声は低めで、音楽は実にしつかりと主張してくる。ギャップの激しさが、この子の暮らしをどう彩ってきたのだろう。

彼女は出るとすぐ、父に電話をしていた。夕食は家にとるといので、コンビニで楽譜のコピーを取り、皆で駅まで送って別れた。自分達はいつもの店で夕食と呑みである。洋食中心で庶民的な居酒屋は、いつもそれなりに人がいて、それなりに空きもあって、練習後の雑談にはむしろ気楽だ。

「どうよ」

乾杯の後、桂木が口火を切ると、すぐに岩瀬が飛びついた。「そりゃあまあ、びっくりするわ。あの子、コンクールとか



出ないの？」

「親だけじゃなく、先生の意向で今まで出たことないらしい」

「先生は？」

「御所川光顕」

「大御所じゃん。秘蔵っ子ってやつ？」

「そんなじゃないって話だな。それに奥さんが亡くなつて、おばあさんがいるとはいえ、母親のいない所帯はなかなか大変だと思うんだ、コンクールで話題になったりすると。おばあさんは昨年から入院していて、今彼女が家に帰つて、迎える人はいないそうだし」

「でも」思わず口が開いた「二人でやっていくタイプに見えるけどなあ、彼女」

「まだ十六じゃない」岩瀬が唇をとんがらせる「あの頃の女子同士ってタイヘン。あの性格なら、周りとはぶつからないわけじゃないし」

それはわかる。ただ、さゆきのような子は、周りに合わせて作り笑いをすることなど、はなから眼中にないんじゃない

か。困難であってもそうせざるを得ない、それは強さといったものでなく、あの子の生業にしか見えない、そんなオーラを振りまくからこそ目立つんじゃないだろうか。黙っていると、岩瀬が続ける。

「女子の場合、昼休みや放課後に完全な単独行動をするって、ものすごく無防備なことだからね」

「女子校じゃなく、共学でも？」

「同じ、同じ。違うと思うなら、むらさんが男だから」

そういうものか、どうもピントが狂ってるんじゃないかと思っていると、桂木が再び話し始めた。工藤からの話では、第一志望の都立校に受かったまではよかったが、管弦楽部でこれまでのレッスン同様の高みを目指そうとして衝突、合宿で先生やOBOG達とも対立して四面楚歌となり、退部したという。

しかし、四面楚歌になったというだけで、あの子がやめるだろうか。

「それじゃあ今は部活とかは……」

「ほかの音楽系クラブも考えたけど、前と同じ問題が起きる

だろうからって、入っていないそうさ。それで、学内でも学外でもいい組織があればいいんだけど、その前に俺達のとこで見学してアンサンブルする姿を見て、それをクッションにしつつ、先のことを考えるらしい」

目に浮かんじやうね、と岩瀬がため息をついた。都立高校でも上位を争うところで、最近評判が上がってきている。自分がいた頃の都立校はだいぶ昔だが、そんなひどいところだった印象はない。今は違うのだろうか、もっとも人のことをあまり気にせず過ごしていたから、気づかなかっただけなのか。

岩瀬が静かになったので、気になっていたことを尋ねた。

「話さなかったのは、先人観無しにまず会ってもらうってことか」

「そうゆうこと」桂木がビールをあおる「見学とはいえ、一応は預かるわけだし、ちょっと緊張してたかもな」

「次からはどうするの」

岩瀬が桂木と自分を交互にみている。桂木を目で促した。

「まあ一緒に練習しながら……」

「私にとつては、ヴァイオリンの席をかけた争いが始まるようなもんだけどね、まああの子の方がうまいから仕方ないわ」

「そういう話じゃない……」

「そうかもしれないけど、あの年齢であの腕、音高や音大に行っても不思議じゃないし、年齢から考える伸びしろは相当なものでしょ」

「ちょっと待った」思わず口を挟んだ「あの子はアンサンブルをあんまりやってこなかったから、まずは見学してアンサンブルというものを肌で知ろうってわけでしょ、あんまり想像で突っ走ってもね。席の争いは、あの子がここにずっといたいと表明してからの話だし、こんなレベルの低いところはイヤって言うかもしれないんだよ？」

実も蓋もねえなと桂木が笑い、それこそ聞きたくない話、と岩瀬はまたため息をついた。

「いや、逆にみんなヘンだよ。工藤さんが俺らに預けたのは、長くアンサンブルを続けているからだろうし、まずそれを見学して、音の会話や、人間同士の会話をみてもらおうっ



てことも含まれてるんでしょ」

そんなことわかってるよ、という岩瀬に構わず続ける。

「年を食っていて、団体としての利害関係みたいなものないから、プレーンに付き合えるつてのは、忘れちゃいけないこと……」

「あの子がチェロ弾きだったとして、むらさん、同じこと、言える？」

そうなのだ、岩瀬は若いヴァイオリン女子を暖かく迎え入れてはいるが、同じ楽器を奏する者としての嫉妬も当然感じている、それも激しく。もちろん自分にそれがないとは言えない、これまでだってオケや弦楽合奏で席次争いをしたり、選抜する側に立ったりした。でも、嫉妬で動いてろくなことはなかった。それは三十代も後半に入ればお互いわかっているはずだ。

「自分達なりにいつものように弾きながら、どうやって少しずつでも楽しくいい響きにしていけるかをやる以外、どうしようもないし、それであの子がどう思ったとしても、それはあの子の matter だ」

「本音、言いなさいよ」

「嘘なんか言ってねえよ」

「こういうとこ、時々むっかつくんだよね」

むっ、に強いアクセントを置く岩瀬。鷹揚な彼女が今日はいく絡んでくる。嫉妬というより、あの子にとってよいおねえさんでいたい、という願望があつさり崩れ、逆にあの子に選ばれたと思うっている、ということなのか。

「まあさ」今度は桂木が割って入った「あの子の音楽的な才能が俺達より上なのは、よくわかったし。工藤さんは細かいことを言わないし、指示めいたことも言いたくないんだろけれど、多分みんながさゆきちゃんと同じようには出来ないことは、わかってもらいたいんじゃないかな。あとは楽しく音楽している姿をみてもらうしかないな、と」

岩瀬は少し赤くなっている。

「むらさんと基本は同じね、まあそれしかないよ、わかるよそれは」

「どしたんだよ」

「ヴァイオリンがいくら好きでも、日々の仕事はあるし、毎

日は弾けないし、腕は衰える一方だし、それでも音楽は好きで離れられないし。そんな中で、あんな子が来れば、ちょっとシヨック。みんな何も感じないわけ？ そりゃ逆に、不感症だよ」

そう、何も感じないわけじゃない。自分だって、音高生でもない少女に圧倒的な才能を見せられれば、驚く。

「でも、あの子がいわゆる職業音楽家になりたがっているようには見えないんだよな、だからいつものままでいるしかないって思うんだよな」

「そうそう」 桂木が店内の喧噪を避けるように身を乗り出してきた「そこは大事なポイントだと俺も思う」

たったの二時間で、これだけの思惑を巻き起こせる工藤さゆきという存在そのものが、むしろポイントなんじゃないかという気がする。

月に二回の練習に、来られる時は来る、という話だったが、蓋を開けてみると毎回来る。自らどんどん弾いてくるわけではなく、見学が中心だ。楽譜を準備し、丁寧に予習し

て、こちらの合奏に耳を傾ける。なぜそのように弾くのか、どうしてそのような合わせ方になるのか、どこに耳を傾けるかを質問してくる。促されれば弾くが、その際には自分の弾き方で押し通し、違いをどう感じるかも尋ねる。誘われても、夕食は必ず家に帰る。律儀な三ヶ月はあつという間に過ぎていった。

合奏前の昼食を家で作るのが面倒になったため、早めに家を出た。駅を降りて、たまに入る喫茶店でランチをとろうと歩いていると、向こうからさゆきが歩いてくる。黒い服で地味に固めていても、目立つものは目立つんだなと思った途端、さゆきも気づいた。こんにちとはと会釈しながら近づいてくる。こういう時、笑顔にならないのはスタジオ入りと同じだ。

「駅からじゃないんだ」

「楽譜を買って、バスに乗ってきたんです。コピーの製本って頼れないし、少しずつ集めたいですから」

「たまに行く喫茶店でランチを食べようと思うんだけど、どうする？ 一緒に来る？」



「行きます」

即答だった。ゆるゆると店に向かうが、中年男が目立つ少女を連れていけば、普通以上に目立つ。いつも浴びることのない視線が時折やってくる、みんなそんなに好奇心を感じるのかと苦笑していると、後ろから肩を叩かれた。

「もしもし、保護者の方ですか、お連れは中学生ですよね」
口を開こうとするさゆきを遮った。

「高校生ですよ。この子の保護者の友人で、合奏に参加してもらってるんです。早めに着いたんで、一緒にランチ。午後二時には他の仲間とスタジオ入りですが、確認されますか。何ならこの場で、彼女から親に電話してもらってもいいですが」

上から下まで舐めるようにみていた二人組は、失礼しました、と去って行った。

何か言いたそうなさゆきに、もうそこだよと喫茶店の入り口を指差す。階段を上がり、禁煙席に落ち着くと、彼女はため息をついた。

「まあバスタかサンドイッチかオムライスだけど、好きなも

のを」

「ここはその。ちょっと高めみたいなんで……」

「気にしないで。社会人なら普通に払える金額だから、遠慮しない」

また大きな眼で見据える。これをやられるといつも参るな、と思った直後、素直に頭を下げた。

「ありがとうございます。あと、さっきはすみませんでした」

「なんであやまるの」

「あんな風に言われるなんて……」

「明らかに親子じゃないとあやしまれるんだって実感したよ」

「でもあやしい人じゃないって絶対、わかりそうなものなのに」

絶対、に力を入れるのが彼女らしい。

「ああいう人達も仕事で巡回してるからね。見逃しがあつたとなれば、それはそれで問題なんだし、もう気にしない」

前回の合奏の感想に話題を変える。話しているうちに、ふ

と思った。早めに集まって、こんな風に話せばいいんじゃないのか。

頼んだサラダとパスタがやってきた。食べながら話題が途切れた時、さゆきがふと手を止めた。

「私、ご迷惑かけてないですか」

そんな風に思っていたのか。

「なんで。迷惑なわけないよ」思わず身を乗り出してしまふ

「音楽に真剣、弾けば真つ当、いつものメンバーだけじゃマンネリ化するし、新鮮さ。むしろこつちが、居心地悪くないか、楽しんでいられるかが気になってるくらいだ」

「その、楽しんでるっていうの、よくわからないんです」

「今でも楽しんでるように見えるけどねえ」

さゆきはため息をついて、フォークを置いた。自分はただ音楽をやりたいだけなんだけど、楽しくやってるかそうでないかと聞かれてもよくわからない。それに、既にヴァイオリンの先輩がいるところに割り込んでるような気がする、学校で管弦楽部に入っていた時、コンサートマスターを最初から狙ってるとかあれこれ言われて居づらかった、それに練習で

考えていることを素直に言おうと、出来る訳ないって言われる、同じことがここでも起こりそうで気にしてたけど、いざ弾くと忘れちゃって、つい言いたいことは言っちゃう――

訥々と、言葉をゆっくり選びながら話す。反応の速い彼女らしくない逡巡に、それでも何か抑制しつつ話しているのだろうと小さな肩を見る。こうしていれば、ちょっと色白で目立つ小さな高校生で、でも知っている人にとっては広げた翼をあえてきつく閉じている姿が重なる。

「ここで、あなたが言ったことを全面的に否定した人はいないよね。だからまあ、とりあえずへんなことを言っていると
思ってる人はいない。安心していい」

はい、という彼女は肩が上がっている。こんなに張りつめていて大丈夫なんだろうかと、少し心配になる。そうか、それで工藤さんがこつちによこしたのか。

「楽しんでるって、一人一人違っていいんじゃないかな」え、というさゆきの声に、パスタのびちゃうから食べて、と促して続ける「ある人は、何となく合奏の中に入って、何となくそれっぽい音がしていると、合奏の一員でいられたこと

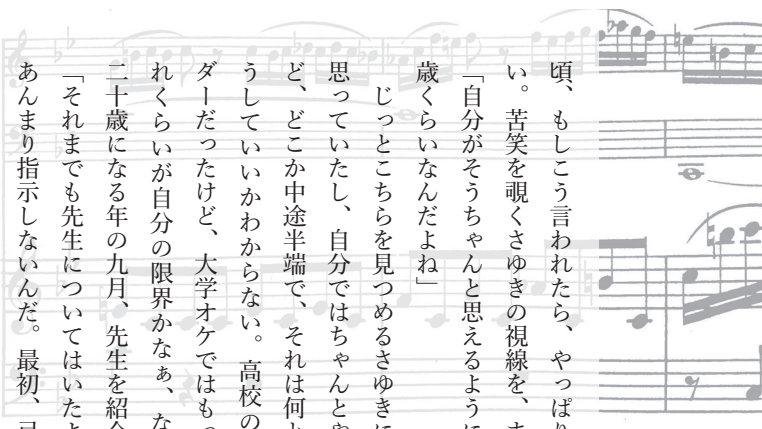


に満足できる。それは音楽としては褒められないし、本人もわかってるけど、難しいことは出来るわけないからここまで出来ればいい、と決めちゃうんだろうね。そういうのとは違って、うまくならない、褒められたい認められたいって人なら、とにかく練習するし頑張るから、テクニカルな問題は何とかなる。けど、目指す響きにいくより、みんなが注目してくれるように弾いたりする。これも音楽の本来の姿じゃないかもしれないけど、音楽をコミュニケーションの道具と感じてる人にとってはじゅうぶんなのかもしれない」

「ここにはいないですね、そういう人は」

「そうだね。逆に、大変とかつらいとか関係なくて、とにかく目指したい響きがあつて、それを実現するために練習して工夫して、それが出来ると楽しい、ラクじゃないかもしれないけど、とにかくいいんだって人もいる」

「あの。そういうのと全然違う演奏が楽しいっていうのが、よくわからないんです。合っていない音や、それっぽく真似てるだけみたいので、やっていて本当に楽しいんでしょうか」
なるほどなあ、これが才能か、と思う。自分が高校生の



頃、もしこう言われたら、やっぱり嫉妬していたかもしれない。苦笑を覗くさゆきの視線を、まっすぐ見返した。

「自分がそうちゃんと思えるようになったのって、実は二十歳くらいなんだよね」

じつとこちらを見つめるさゆきに話す。うまくならないと思っていたし、自分ではちゃんとやってるつもりだった。けど、どこか中途半端で、それは何となく感じるんだけど、どうしていいかわからない。高校の管弦楽部ではパートリーダーだったけど、大学オケではもっとうまい人がいたし、これくらいが自分の限界かなあ、なんて思っていた。でも、二十歳になる年の九月、先生を紹介された――

「それまでも先生についてはいたよ。ただ、新しい先生は、あんまり指示しないんだ。最初、弓の持ち方や姿勢、手首や弓の速度をやましく言われる。初歩の初歩だよ。それが静かになったと思うと、もうあんまり言わない、自分で考えて来いって言われる。それで、背伸びしてショパンのチェロ・ソナタを持っていた。弾いたらさ、それは聴いたことがあるデュ・プレの演奏に、ロストロポーヴィッチ風味を半

端に混ぜただけだろう、お前は思うんだ、曲に真剣に向き合ってるのか、お前はその曲が本当に好きなのかって、怒鳴られた。本気で手を震わせて怒っていたんだ。確かに本当に好きじゃなくて、新しい先生に認められたい一心で弾いていたし、曲をちゃんと感じていないことを見抜かれた恥ずかしさで、何も言えなかった。どれでもいいから一曲、わかって仕上げるまで来るなって言われた。ショックでね。三ヶ月行けなくて迷っていたら、先生から電話がかかってきた。何をやっとする、すぐ来なさいって、また怒鳴るんだ。まだ何も出来ていませんって言ったら、今一番聴きたいと思う曲をすぐ持つてきなさいって、電話越しに大声で「

さゆきは黙って聞いている。一口パスタを食べると、ぽつんと言った。

「いい先生ですね」

「ああ、本当にいい先生だ。でもあの頃の僕はバカで、また怒られるんじゃないかって怖かった。仕方なく行ったんだ、ここで行かないと何もかも終わっちゃう気がしたから。ただただ悲しくて、そのことしか感じられなかったんで、暗譜し

ていたフォーレのシチリアーノを、その時に感じていたテンポで、ゆっくり弾いたんだ。そしたらさ、なんて言ったと思う？」

まぶしいものを見つめるような眼で、彼女は「さあ……」とだけ答えて、次を待っている。

「悲しいなら悲しいように弾く、やっとう当たり前のことが出来るようになったなって。優しい声でね、涙をこらえるのがやっとうだった。先生が弓遣いの初歩をやり直させたのは、息づかいのように弾くためで、僕が何も考えず弾き飛ばしていることなんか、最初からお見通しだった。ちよつと弾けるようになつたようになっていた僕は、そんなことにも気づけなかった。やっとうそこで、表面を撫でるだけじゃない、音楽に切り込んでいく入り口に気づいた。つまりね、昔は音楽への真剣さがなくて、ある時に気づいたってこと」

何か言いたげにしている、言葉を運び損ねているらしいさゆきに、そのまま続ける。

「あなたが中学生の頃にはとくにマスターしていただろうことに気づくの、僕は高校から大学二年までの時間が必要



だった。しかも、気がつくまではプロになればいいなんて漠然と考えていたんだから、笑っちゃうよね。気づいたらもう、立場などどうでもよくて、ちゃんと弾く場を作ればいいって思うようになった」

話したいことをほぼ言い終えると、パスタをまた口にした。「でも」さゆきは顔を上げた「私も十歳までは何にもわかってなくて、お母さんに心配されて、大変だったんです。ちゃんと気づいて、音楽ってこうなんだって思ったからこそ、頑張ったんですけど……」

この子の必死な表情を、初めて目にした。というより、あれほど楽に弾ける子は、実はそれ以上に人に対して真剣なのだ。それがおそらく人を遠ざけてしまうこともあると、どれくらい実感しているのだろう。

「きつと、ある機会がやってくるまでわからないことの方が多いいだろうねえ。それに、僕はわかってラッキーだったと思ってるけど、わかってしまって、かえって音楽をやめる人もいる」

「どうしてですか」



腹の底から吐き出した絶望の声色で尋ねる。気持ちよいほど真っ直ぐなこの子は、人によってはやっぱり怖いに違いない。

「ああ自分はわかってなかった、入り口はわかったけど、ここからさらに上るのか、もういいやって引き返す人もいる」「そんな……そこからがすてきなのに」

「そのすてきがきつと、あなたの感じる音楽の楽しさだね。それは僕らも感じてる。でも、楽しいイコール安楽、と捉えている人に伝えるのは、なかなか難しい。かつての自分がそうだったから、余計にそう思う。同じ伝え方でみんながわかるわけでもないし」

「そうなんです。どうすればいいんでしょう」

ほら、食べないと伸びるよ、と再び促して、自分もまた食べる。この子はあまりに真っ直ぐで、ぶつかって折れて投げ出してもおかしくない、そんなことはこれまで何度もあったろう。なのに、まだ絶望していない、というより、自分達の合奏に糸口をつかもうと見に来ている。単に若くて先が長いからまだ絶望の機会が訪れていない、というのとはきつと違

う。この子は諦めない、それこそがおそらく命なのだ。最初に出会った夜の自分達の会話を思い出すと、恥ずかしいかな。工藤さん、失礼ながら、あなたの娘さんは言動からわかることよりずっと大人で、あなたの心配よりずっと先のことを見据えていますよ。

「まあ、簡単にはいかないわな。人数が多いアマチュアオーケストラだと、技術も曲への取り組みもみんなまちまちだから、余計に」

「でも、先生やOBなら、今よりもっとすてきな響きになるからこうしようって伝えられる人がいてもおかしくないじゃないですか」

「そうだねえ。ただ、そのオケで常識とされるやり方を変えて、厳しくて辞める人が増えたり、そこそこの響きにまとめられるのに崩れちゃう場合があると思うと怖い、演奏会は一応お金をとるのだし、って人もいるかもねえ」

「失敗したっていつでも、それまでやることはやっていて、それでうまくいかなかったわけじゃないですか。技術的にはまちまちなのは恥ずかしいことじゃないし、目指したい響き

の方向や、伝えたい感情が伝わるなら、それでいいと思うんです」

コーヒーと紅茶が来てしまった。店は遅めのランチ客で、いつの間にか混んでいる。急いでパスタを巻き取っていく。飛んだトマトソースが手に当たると、さゆきが笑った。ここに来るようになっておそらく初めての笑顔は、ひどく穏やかでかわいらしい。真っ直ぐゆえの誤解に満ちたこの子は、なかなか見せる機会がないだろうか。

合奏はいつものように前半の九十分を自分達が弾いて、時々さゆきが質問する。最初のコーヒー休憩の後で、岩瀬からさゆきに交替する。今日はモーツアルトのハ長調、K五四八。優美さだけでなく、ハ長調の威厳、恰幅のよさが加わる。真っ直ぐ進むハ長調の音形はさゆきに少し似て、彼女も伸びやかに弓を運ぶ。

第一楽章が一段落したところで、桂木がいつものように二度目のコーヒーを配っていく。一口吸ると、さゆきが昼の喫茶店のことを話し始めた。時折こちらからも少し補足する。



頬に人差し指を当てながら聞いていた岩瀬は、聞き終わるとすぐに口を開いた。

「人がたくさんいると、やっぱり理想通りにはいかないから、何か基準を設けて、最低限やること、出来ればやりたいこと、今は無理なことって分けるのが、やっぱり現実的かもねえ。さゆきちゃんの言うことを否定するんじゃないけど、オケ全体としてまとめるために今出来ないことは、やっぱりやるなど言っちゃうかもしれない」

コンサートマスターを経験した岩瀬らしい。さゆきが身を乗り出した。

「それはコンマスをやってきた結論なんですか」

「結論じゃなくて、メンバーと曲と時間、そしてみんなが望みをどんな風に持てるかによるってこと」

でも、と寄るさゆきを手で制して続ける。

「さゆきちゃんがやろうとしていることは、高校オケだけじゃなくて、大学オケでも難しいんだよ。上手なアマオケのトップクラスから、さらにオーデイションで選抜された人を選ぶくらいでやっと、出来る。そういう風に、メンバーの揃

え方、前提条件によって異なるってこと」

さゆきを見ていた桂木が立ち上がった。

「学校の部活だと、学年や、運営の要役をやってるかどうかの影響力も関係してくるから、そういうのを無視するのは難しいとも思う」

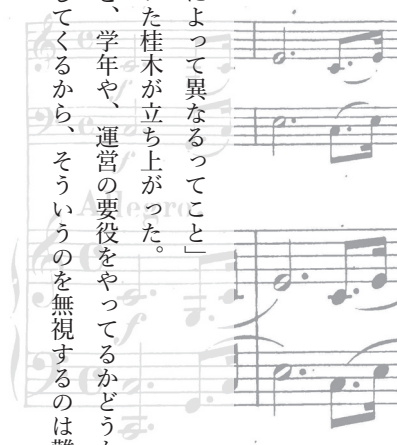
「ちよっと待って、そういう話をしたいわけじゃないだろ」
そう口を挟んだ直後だった。

「私は、成功かそうじゃないかってことで、分けたくありません」

これまで聞いたことがない大声に、三人は動きを止められた。肩の震えを深呼吸で押しとどめようとしているさゆき。

まるであの時の先生のような。岩瀬が近づこうと踏み出すや、立ち上がった。胸を張るその姿は、自分達が慣れてきた最近の大人しい彼女ではない。翼を広げ、身長よりはるかに大きく見えるさゆき。岩瀬は気圧されたように足を止めた。

「学校の名誉とか、伝統とか名門とか、何なんでしょう、音楽にそんなの、関係ないじゃないですか。真剣に音を、響きを出すための道をたどって、その途中でもいいんです、向



かっている先がどこなのかかわかれれば。ちゃんとやれば、下手でも揃わなくても、伝えようとしてやっていることや、どっちを向いてるかくらいは、音に出てくるじゃないですか、そのどこがいけないんでしょう。こうすればうまく聴こえるなんて、そんなごまかしでだまされるような音楽って何なんですか、そんなの繰り返し聞こうと思わないじゃないですか。最初は一人かもしれない、でも続けていれば人数が増えて、先に進んだ人が、後の人を待ったり手を貸したりして、そういうことが出来ればいいじゃないですか。期限とお金が関係ないアマチュアだからこそ出来る音楽って、そういうことじゃないんですか。私、うまく弾こうとか、そんなことのために言ってたことは一度もないのにつ。そんなの、プロに任せとおけばいいんですつ」

ああ、誰もがだまされる、この子の少し幼い外見に。もっと低いレベルの悩みかと思わされてしまう。でも、この鋭い眼差しを宿す子が、遠くを見通す知性を持たないはずがない、吸い込まれるような瞳を持つ子が、気高さを纏わないはずはない。

岩瀬はゆっくり近づいた。

「あなたの言いたいことがわからないわけじゃなくて、限られた時間であなたと同じようなことを共有できるとは限らないからどうするかって話をしてるの」

「でも、それは結局、お茶を濁して終わらせることと同じになりませんか」

「たとえばね」岩瀬は肩で一度呼吸をしてから続けた「ここみたいな小さなアンサンブルなら、人が揃えば出来る。あなたの望み通りかはわからないけれど、真剣に音楽をやっている自負だってある。でもオケみたいな大人数の場合、そもそもそこまで聴こえていない人を、ちゃんと聴こえるところまで連れて行くだけで、どれだけ苦労するか。それは続けてみないとわからないだろうし、世の中にいるいろんな人達を許容しないとやっていけないってこともある。悪貨は良貨を駆逐するって、冗談じゃなくて本当にあることだし、その中で生きていくためのメソッドというのもあるの」

「私が言いたいのは、純粹なだけじゃ生きていけないとか、そんな話じゃないです」

「じゃあ何」

珍しくいらついたように睨む岩瀬に、さゆきは再び胸を張った。桂木に目をやるが、動こうとしない。自分も動くつもりはない。

「そこそこの響きにおさまる演奏なんて、プロが定期演奏会でいくらでもやってるじゃないですか。有名なオケだって、すごい演奏は年に数回とか数十回、他の演奏会でも失敗は本来は許されない。プロのそういう制約がないからこそ、年に一回か二回の演奏会に、うまくいく保証なんかなくていいからいろんなことをつぎ込めると思うし、やりたいことをしっかりやろうとしている、面白い演奏をやると思うんです。意志の通つてない演奏なら、わざわざ自分達がやる意味はないんじゃないですか。ここはちゃんとみんなが考えてやってるし、それはどこでも本来は出来ることだと思うんです」

「だから、その意志を持ってない、何となくぼんやりしてて、耳も意識も開こうとしない人達がいっぱいいるアマオケの場合にどうするかって話を、私はしてるの。あなたみたいな人ばかりだったら、年長者としての苦労はなくなるし、安心し

てパートリーダーやコンマスを譲ってあげるよ」

「パートリーダーとかはどうだっていいです」

「じゃなくて、やる以上、言つた以上は、地位と責任を引き受けて、人を背負つてみるの。ヒエラルキーのない場所に秩序は生まれなし、秩序のない響きなんてあり得ない」

「誰がリーダーとかいう形じゃなくて、それぞれが意志を持って、出来ることはみんな違うけど、やる方向をある程度共有しながら、出来ることをやって、助けられたり助けたりしながらやる方がずっといいと思いませんか」

「ほとんどの人にとっては、何となく世の中が流れていて、その中で適当に気分のいい場所にいらればいいだけで、自分の意識を隅々まで渡らせるなんて、むしろ悪夢って人の方が多いの。それは覚えておくといいよ。腹黒と呼ばれようが何だろうが、やることはやってやるくらいじゃないと、まともなものもまとまらない、それは音楽も会社も社会も同じ」

「それは」桂木より自分が先に立ち上がった「ゆいさんの生き方、価値観だよね。僕は違うし、かつらさんも違う、僕とかつらさんも違う。それでも三者三様に生きて、息をして、

合わせてるじゃない」

人数が少ないんだし、と言う岩瀬を手で制して続ける。

「さゆきちゃんが毎回欠かさず来ているのは、こうやってよく言い合いになる僕らが、それでも合奏だけはやろうとしているのを見ているからじゃないの？　そういう意味じゃここは、彼女にとっていくらかまともに音楽に接している人達に見えていて、何か自分のヒントになることがあるかもしれないって思うからじゃないのかな」

さゆきが小さく頷くのを見届けると、岩瀬は自分の椅子に戻って座った。

「もちろん、わかるよ、そういうのも。さゆきちゃんのような青さは、私だって持ってたし、今もあるよ。でも、かなぐり捨ててやる瞬間もある、それは知ってほしいんだよ」

「たださ」桂木だった「青さというのはちよつと違うかもしれない。そうやって生きざるを得ない人ってことなんじゃないかな」頷いて口を開けようとするこちらを手で制した「だから親は心配するし、いろんなやり方を知ってほしいと思うし、合う人がたくさんいる場所に出してやりたいと思う。で

も、二十歳年上を相手に一步も引かない人を、ただの青い少女と俺は思わないし、この人は経験こそ浅いけど、その辺の大人よりずっと大人だとも思う。既に学校の管弦楽部の年上達も、この場でも、これだけ人を動かしてるんだからね。どこか自分が入れる場所を見つけるにせよ、新しい場を作り出すにせよ、何かやるだろうし、それを楽しみにしてるんだよ」

さゆきは眼を数度しばたたかせていたが、突然お辞儀をした。

「じゃあ……これまでありがとうございました」

え、と驚く三人に「だって、これで私はもう来れないですよね」と続ける。

桂木が吹き出し、自分も加わると、岩瀬は声をあげて笑い出した。岩瀬は目尻に涙まで浮かべている。眼を開いたまま固まっているさゆきに、最初に笑いから戻った桂木が顔を向けた。

「そんな風に、言い合いや仲違いをしたらもういられないとか、考えなくていいんだよ」

「え、でも、新しい場に行ってねってことじゃないんですか」
「違う違う」今度は自分が先に口を開いた「ここには居たいだけ居ていいんだよ。演奏会をやる時、出たいなら席も作る。他にいいところを見つけたからここを離れるなら、それでもいい。あなたのこれからが楽しみだねって言ってるだけ、学校みたいに硬く考えなくていいんだよ」
「私もあんなだけ言っただけど、相手があなたじゃなかったら言わない。言う以上は、信頼してるの」

「ほんとに私でいいんですか？」

岩瀬に尋ねる彼女はおそらく何度も、ぶつかっては人との糸を切られる状況になり、いつの間にか自分で切る側に回る習慣がついたのだろう。

「私はそんなに狭く苦しい人間じゃないつもりだけどな。それに、新鮮な音を出すヴァイオリン弾きがいるのは、いいことだとも思ってる。悔しいことに、私よりうまいけどさ、でも私にも譲れない音楽はある。それだけ」

本人を前に認めたかあ、とはやす桂木に、そんなの最初からわかってたことだし、と涼しげに流す岩瀬。この子は、自

分の周りに渦巻く幻想や妄想に冷や水を浴びせながら歩き続けてきたのだろう。でもそろそろ、もっと肩の力を抜いた生き方をみつける機会はあるといいし、それを見届けるかもしれない場に自分がいるのは、もしかするとんでもなく幸運なことなのかもしれない。

さゆきは、こちらを見て、小さく会釈した。頷くと、満面の笑みを見せた。その素直な笑みに、桂木も岩瀬も動きを止めた。

「初めて笑ったねえ。じゃ、続きをやるかあ」

岩瀬の明るい声に、さゆきは大きく、はいと答えた。まだ四十分は弾ける。K五四八の冒頭、2オクターヴに渡る飛行は、広く軽やかで、桂木は微笑みながらソロを紡ぐ。ジュピター交響曲に繋がる世界へ大きく弓を動かすさゆきが、遠慮なく翼を広げていく。同じ動きを低音でたりつと、この少女をもっと深い響きで言祝いでやろうと鳴らすと、ふいに眼があった。微笑んださゆきがさらに澄んだ音で上昇する。

肌が粟立つのは、音の明澄さゆえか、少女の願いの大きさゆえか。いやもうどうでもいい、この響きに幸あれ。